

杭引抜工事 工法の比較表

工法名		バイプロケーシング工法 (高周波バイプロ使用) ベースマシンは同じとする		オーガーケーシング工法 (アポロン使用)ベースマシンは同じとする	
作業手順	①杭抜き機の組立	・クレーンでバイプロを吊上げる ・バイプロでシートパイルを掴む ・シートパイルにウォータージェットの配管を接続する		①杭抜き機の組立	
	②吊荷の重量	パルソニック杭打抜機 5.8t 鋼矢板 L=10.0m 0.8t		②吊荷の重量	リーダー L=17.0m 4.0t オーガー 4.1t ケーシング L=12.0m 2.3t
	合計	6.6 t		合計	10.4 t
	③最大作業半径	14.0m		③最大作業半径	10.0m
	④掘削	・杭に添えて、垂直運動で打ち込む ・打込みの時、水を噴射させて、杭周辺の摩擦を低減させる ・打込んだ反対側も同じ作業を繰り返す		④掘削	・杭に添えてケーシングを回転させて、押し込む ・押込む時、水とエアーを噴射させて、杭周辺の摩擦を低減させる
	⑤水使用量 L=9.0引抜時 掘削時間30分	0 ~ 600ℓ (水圧ポンプ最大吐出量 30L/min)		⑤水使用量 L=9.0引抜時 掘削時間30分	600ℓ (水圧ポンプ最大吐出量 46.9L/min)
	⑥引抜完了の確認方法	・杭設計長さより多く (1.0m弱)打込む。		⑥引抜完了の確認方法	・既存杭が回転する。目視による確認
	⑦引抜方法	・杭上部にワイヤーを掛けクレーンにより、吊り上げる		⑦引抜方法	・ワイヤーをケーシングの先端にセットし、掘削孔に差込み、上部より三分の一以上のところでセットし、クレーンにより吊り上げる
			評価		評価
特 性	騒音	・有るが少ない。S59低騒音型建設機械の指定がされている。 5m地点にて65db 当現場基準値85db	△	騒音	・非常に少ない。オーガーのモーター音と、土と杭の摩擦音のみである。 ○
	振動	・有るが少ない。H8低振動型建設機械の指定がされている。 7m地点にて60db 当現場基準値75db	△	振動	・非常に少ない。土と杭の接触時に多少ある。 ○
	杭長さに対する対応	・掘削完了時の確認が不確定の為、杭が長い時 (10.0m以上)は 困難である	△	杭長さに対する対応	・ケーシングの長さの調整が可能の為、杭が長い時に対応し易い。 ○
	メリット	・杭抜機組立手順が少なく、高所での作業が無い。 ・水の使用量を調整が可能で、作業足場の崩壊が低い。	○ ◎	・杭引抜時のワイヤーはケーシングにセットするため、安定した地上で出来る。	○
	デメリット	・振動が発生するが油圧による高周波のため、在来工法より対策されている。 (基準値をクリア) ・シートパイルを掴むとき、はずれる場合がある。 ・シートパイルを吊り上げ旋回する際に、振れて接触する危険がある。	△ △ △	・組立後、クレーンを倒すことが困難なため (リーダーによる)、作業終了後、風などの影響を受けやすく、倒壊の恐れがある。 ・水の使用量が多く、又ケーシングの回転により、地盤が軟弱化し、作業足場の崩壊の可能性が高い。 ・杭抜機組立手順が多く、高所での作業が有る。 ・リーダーによる作業の為、横の倒れに弱い。	△ × △ △
安 全 性	メリット	・吊荷が軽く、ワイヤーによる作業の為、機動性が高い。 ・作業半径が大きく、移動回数が少ない。 ・シートパイルをはずすと重量が軽くなる。	○ ○ ○	・引き抜きにおいて、掘削孔が水で充たされていて、浮力が高まり、吊り上げ途中まで、軽くなる。 ・鉛直性がよい。(10m超の杭に適する)	○ ○
	デメリット	・風により、シートパイルが振られる場合がある。 ・10m超の杭の場合、鉛直性の精度が下がる。	△ △	・吊荷が重く、常時同じ重量である ・比較して作業半径が小さく、移動回数が多い。	△ △
機 動 性					
経 濟 性		・バイプロの機械損料は、高価であるが、ベースマシンが小さくてすむ。 ・敷き鉄板、仮設水道料が、少ない	○	・アースオーガー損料は、安い。 ・ベースマシンが、比較して大きい物が必要である。 ・組み立て費がかかる。 ・仮設資材が、多くかかる。	○
工事完了後の地質変化		・湧水による状況で、水使用の加減が可能であり、現状より軟弱になるのを防ぐ事が可能である。	◎	・水使用での掘削が主であり、水の使用の加減が困難であり、現状の地盤を軟弱にする可能性が高い。	△